



第2回日本ジオパーク 洞爺湖有珠山大会

更なる連携と拡大を確認

9月29日から3日間の日程で、第2回日本ジオパーク全国大会洞爺湖有珠山大会（同大会組織委員会、自治総合センター主催）が、洞爺湖文化センターで、「ジオツーリズムを通じた観光地づくり」をテーマに開催され

ました。大会には、各ジオパークの関係者や専門家、地域住民などのべ2,000名が参加。期間中ジオツアーやシンポジウム、分科会、ポスター・パネル展、体験教育など様々な取組がなされました。

では、「防災の言葉を使わない防災教育、楽しみながら学ぶ防災教育が重要」「被災遺構は、負の遺産ではなく、防災にとってプラス遺産だ」という発想の転換が必要」など多くの意見が出されました。

「現在の学ぶ観光からさらに考える観光へと転換していく必要がある。ジオパークの将来への可能性は高い」と自らの行政での経験を踏まえて発言しました。第2部は、脚本家の倉本聰氏の講演と同氏と伊藤和明NPO法人防災情報機構会長、三松三朗三松正夫記念館館長の鼎談。倉本氏は、東日本大震災をふまえて、「豊かな生活を求めて戦後来たが、便利なくらしとは一体なんだったのか」「今後の人間の生き方として、豊かさを求め続けるのか、豊かな暮らしをすてるのか。どの道を選ぶのか問われている」と言及。「地べたの過去の営みを見ることができるとのジオパークを宝として守ってほしい」と結びました。



ジオパーク宣言を読み上げる各首長ら

30日には、メインのフォーラムや講演会が行われ、各地域の活動紹介や観光地づくりが議論されました。

午前中に「ジオパークと観光」「ジオパークと防災」「ジオパークと教育」「ガイドの役割」の4分科会が各ホテルで開催。

「ジオパーク防災の分科会」

午後からのフォーラムは、1部がシンポジウムとパネルディスカッションで、岡田弘北大名誉教授と大島直行伊達市噴火湾研究所所長が基調講演。岡田名誉教授は、ジオパークと防災の関係についてふれ「地球をよく知り、行動することは、火山をよく知り、行動することに通じる」と述べ、東日本大震災で事前の避難訓練で助かった事例をあげながら「知ること、普段からやっていることは災害時でもできる」と改めて日常での防災教育の必要性を訴えました。

大島所長は、ジオパークを新しい知的観光資源として位置づけ、これからの観光を考えると



西山散策路を歩くジオツアー



学習成果を発表する洞爺湖温泉小学校の児童ら